

斐川町文化財調査報告8

西谷遺跡緊急発掘調査報告書

1988年7月

島根県 斐川町教育委員会

I. 調査の経緯と周囲の環境

昭和63年5月、斐川町荒神谷整備準備室より(有)弥生の館建設にむけて、汚水排水等の処理施設である合併浄化槽設置工事をする旨の連絡を受けた。町教育委員会としては、当該地は周知の遺跡である西谷遺跡の一部に含まれる可能性があるため、島根県教育委員会文化課と協議し、工事に先立って発掘調査を実施することとした。

西谷遺跡は、昭和58年に島根県教育委員会と町教育委員会が行った分布調査で須恵器片を発見したことにより遺跡として確認された。翌59年7月には島根県教育委員会が広

写真1 遺跡近景（南西から）



域農道建設に伴い試掘調査を実施した。その結果、2ヶ所の試掘坑から古墳時代後期～奈良時代の土器が出土し、遺物包含層の存在が確認された。⁽¹⁾



第2図 調査位置図 (1/2,000)

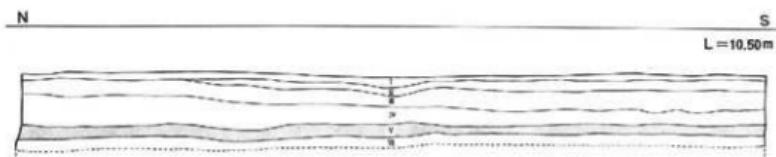
今回の調査地は、昭和59年の試掘坑より南へ20mの地点で、東西5m×南北13mの範囲である。調査地の北側は水田、西側は比高3.5mの丘陵、南側はため池（西谷池）、東側約20.0mのところには昭和59・60年に大量の青銅器が出土して有名になった荒神谷遺跡（国史跡）が存在する。（第2図）

II. 調査の概要

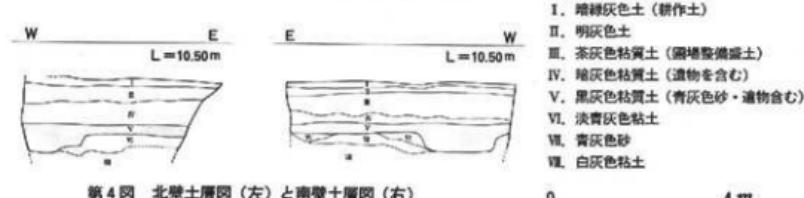
土層と遺構

地表下5.0～7.0cmまでは水田の耕作土（I層）、明灰色土（II）、茶灰色粘質土（III）が堆積する。II層とIII層は昭和47年に行われた圃場整備による盛土層で、その下層の暗灰色粘質土（IV）と黒灰色粘質土（V）は圃場整備の影響を受けていない層であることがわかった。IV層からは古墳時代後期から奈良時代にかけての須恵器が4片出土した。V層は地表下9.0～11.0cmで黒灰色粘質土が2.0cmの厚さで均一に認められた。この層は調査地外にもさらに広がるものと考えられる。弥生土器や古式土師器がこの層から出土している。V層の下には淡青灰色粘土（VI）、青灰色砂（VII）、白灰色粘土（VIII）が堆積する。（第3図、第4図）

調査地の西寄りで南北方向に延びる溝状遺構を検出した。溝の長さは13m以上、幅は浅い所で8.0cm、深い所で6.0cmを測り、深さは4.0cmで溝の底はほぼ平坦である。溝の埋土は黒灰色粘質土（V）に混じって青灰色砂が溝底に堆積する。（第5図）



第3図 東壁土層図



第4図 北壁土層図（左）と南壁土層図（右）

- I. 暗緑灰色土（耕作土）
- II. 明灰色土
- III. 茶灰色粘質土（圃場整備盛土）
- IV. 暗灰色粘質土（遺物を含む）
- V. 黒灰色粘質土（青灰色砂・遺物含む）
- VI. 淡青灰色粘土
- VII. 青灰色砂
- VIII. 白灰色粘土

0 4 m

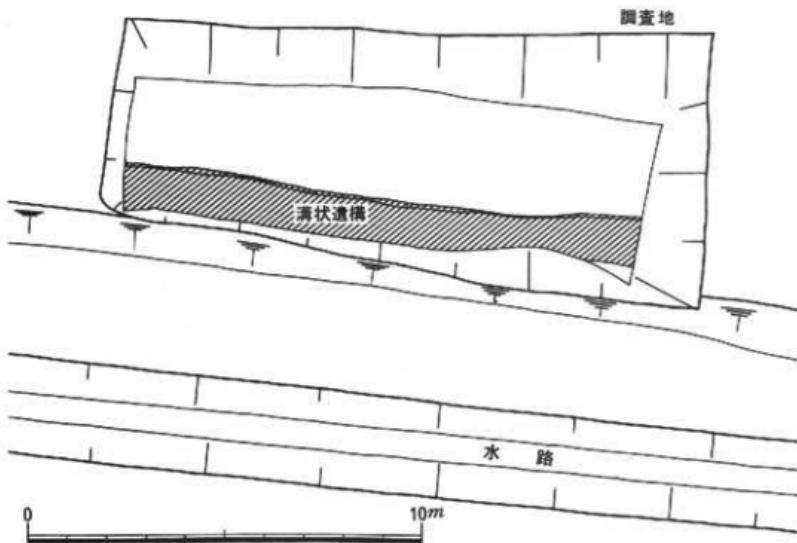


写真2 溝状造構（北半分、北から）



写真3 溝状造構（南半分、北から）

（有）弥生の館



第5図 平面図

遺 物

出土した土器片総数は約100点を数える。そのなかで実測可能な弥生土器2点、古式土師器18点を第6図と第7図に示したので、以下その概略を記すこととする。

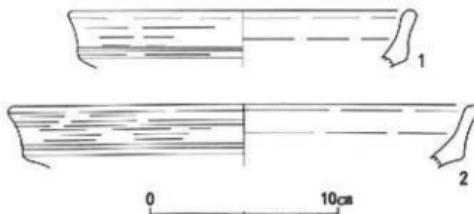
弥生土器（第6図）は2点とも複合口縁の壺形土器で、口縁外面に1は8条以上、2は9条の櫛描沈線を施している。淡黄土色を呈し、1mm以下
の砂粒を含む。弥生時代後期後半のものであろう。



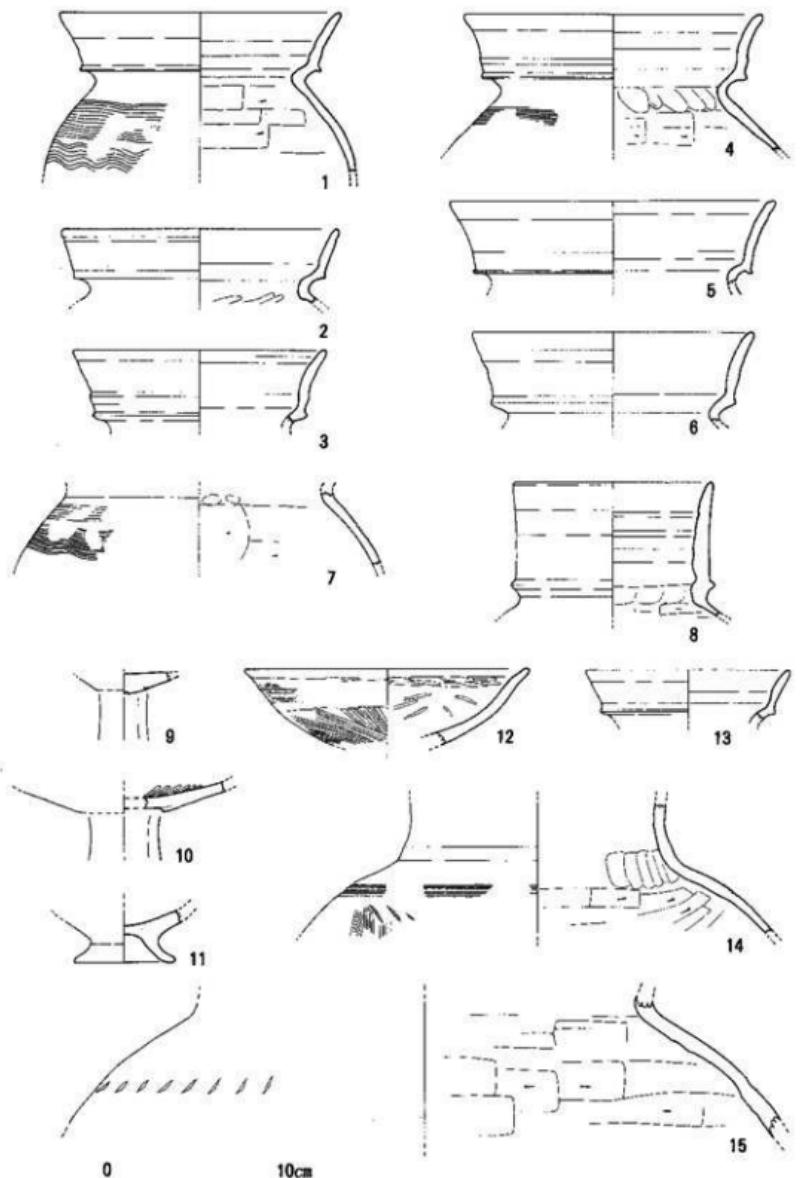
写真4 出土遺物

古式土師器（第7図）には壺形土器、壺形土器、
高坏、低脚坏等がある。1～6は複合口縁をもつ壺形土器で、1は肩部がややまるみをお
び、4はやや張るものである。胎土はいずれも密、色調は1が淡黄橙色を呈する以外2～
6の外面が黒色を呈するのが特徴的である。胴部外面の施文は、1は平行沈線と波状文、
4は平行沈線が施される。7は壺形土器の肩部から胴部で、外面に平行沈線と波状文があ
る。黄灰色を呈する。

13は複合口縁をもつ小型壺形土器で、器壁は薄く作られている。14は頸部から肩部
の壺形土器で、肩部に4～5条の櫛描沈線、刺突文を施す。15も壺形土器で肩部に刺突
文を施す。8は口縁部が細長く直立気味に立ち上がる複合口縁の壺形土器で、頸部の後の
内面に段状の凹面をもつものである。この種の土器は、長瀬高浜遺跡、青木遺跡など鳥取
県で多く、島根県では西川津遺跡などに極希にみられるようである。⁽²⁾ 9、10は高坏の
坏底部で、10は内面にヘラ磨きが施される。11は低脚坏である。12は高坏か低脚坏
になるものと思われ、外面にはハケメ、内面にはヘラ磨きが施される。全体に茶褐色を呈
し胎土はやや荒い。以上古式土師器は古墳時代前期のものと考えられる。⁽³⁾



第6図 出土遺物実測図 (1/2)



第7図 出土遺物実測図(%)

III まとめ

今回の調査で最も注目されるのは、358本の銅劍、6個の銅鐸、16本の銅矛が出土した荒神谷遺跡の隣接地から弥生時代後期後半～古墳時代前期の土器が出土したことにある。これまで、周辺の弥生遺跡といえば、出雲市矢野遺跡、斐川町斐伊川鉄橋遺跡、宍道町清水谷、矢頭遺跡等が知られるが、いずれも荒神谷遺跡からは5km以上も離れている。従って、今回の調査がわずか65m²と狭い範囲であったにもかかわらず、溝状造構が検出され遺物包含層が確認されたことにより、周囲にも集落跡や水田跡等の遺構の存在する可能性が出てきたことは非常に大きな成果であった。

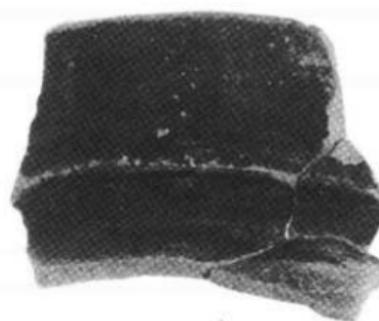
荒神谷遺跡の青銅器埋納は、弥生時代中期末から後期前半以降に行われたと考えられている。⁽⁵⁾ 青銅器とともに時期を決定する土器が出土していないので判らないが、弥生時代後期後半に青銅器がまだ地上にあったのか、すでに埋納されていたのかを知る一つの材料として西谷遺跡の全容を解明することが今後重要なになってきた。そのためにもこの遺跡の詳細な調査が待たれる。

註

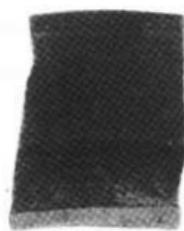
- (1)「西谷遺跡試掘調査の結果について」島根県教育委員会 1986年
- (2)「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書IV・V」島根県教育文化財団 1982・1983年
「青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ」青木遺跡発掘調査団 1978年
「西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ」島根県教育委員会 1988年
- (3)花谷めぐむ「山陰古式土師器の型式学的研究」『島根考古学会誌』第4集所収 1987年
赤沢秀則「出雲地方古墳出現前夜の土器編年試案」『松江考古』第6号所収 1985年
- (4)「第3章遺跡各説 矢野遺跡」「埋蔵文化財調査報告書」所収 島根県教育委員会 1980年
「5周辺の遺跡 1)斐伊川鉄橋遺跡」「西谷墳墓群」所収 出雲考古学研究会 1980年
「清水谷遺跡、矢頭遺跡発掘調査報告書」宍道町教育委員会 1985年
- (5)「荒神谷遺跡銅劍発掘調査概報」島根県教育委員会 1985年
「荒神谷遺跡発掘調査概報(2)」島根県教育委員会 1986年



1



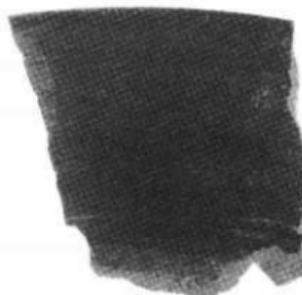
4



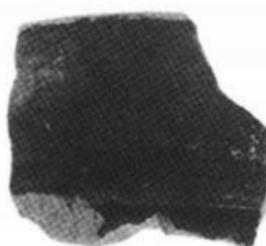
2



3



5



6



7

写真5 出土遺物

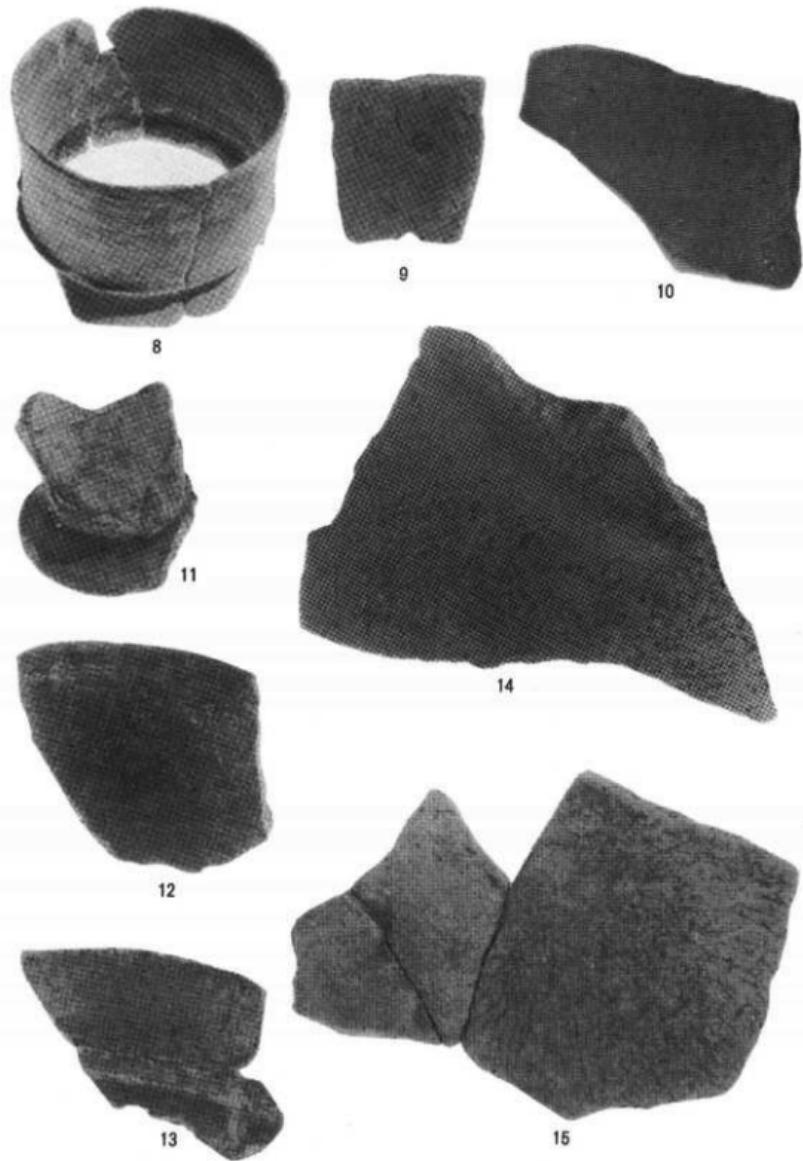


写真6 出土遺物

西谷遺跡緊急発掘調査報告書

1988年7月

発行 島根県簸川郡斐川町莊原2172
斐川町教育委員会
印刷 島根県簸川郡斐川町坂田1664
島根印刷株式会社
TEL (0853) 63-3500